

みんなの声

今月のテーマ わたしの一冊

小・中学校や中央公民館・地区公民館の図書室を大勢の方が利用して、本を読んでいきます。今月は図書をテーマにしました。

楽しい推理小説



倉沢 征男さん
(川西3・46才)

私の読書の始まりは小学生の時に読んだ、江戸川乱歩の『怪人二十面相』だったと記憶している。最近の子供はテレビの影響で本を読まなくなったと言われていたが、もし、それが本当なら小さいころテレビがない時代だった事に感謝しなければならぬと思う。本格的に本に夢中になつたきっかけは、松本清張の『点と線』を読んだ時からである。これを読んだ時に受けた新鮮な

感動は、それまでに読んだ推理小説にないものであり、まさしく私の一冊といつてよい本である。

それから手当たり次第に推理小説を読んだ。正に乱読であり、食事をしながら読んだ事もあった。現在はジャンルを問わず、読んでおり、素晴らしい本に度々出会っている。

中央公民館にある図書室へ行き、じっくり時間をかけて面白そうなお本を捜し出す。良い本に巡り会った時のうれしさは何んとも言えない。ほしがついていたおもちゃを買ってもらつた子供の気持ちと同じだと思ふ。

日中、利用できない人のために火曜日の夜六時から八時までの間、貸出しをしているが、この時間帯

はボランティアの方々協力運営されていると聞いていたが、本当に感謝しています。

みなさんもこの図書室で新たな楽しみを発見してみませんか。

最後に推理小説ですが私のお勧め品を一冊、それはルシアン・ネイハムの『シャドー81』。

童話の世界



高橋志津子さん
(長戸呂・40才)

私には三人の子供がいますが、子供になんとか本が好きになつてもらいたいと思つて小学校に入学するまで毎晩寝る時、童話を読んでもやりました。三番目の子もこの春一年生になりますが、ずっと読んでやっています。

今は三人とも本が好きになつてくれて大変喜んでいます。

童話の世界には夢があり、考え方が美しく、読んでやつていて私も心が洗われる感じがします。

戦争の本を読んだ時、読み終つてから「怖かった」と、また、水原の瓢湖がでてくる白鳥の物語

「コリーヤよ はばたけ」では、「白鳥おじさんは、この間行つて見た人だよ。やさしくて良いんだよね」と子供なりの感想を話してくれたりました。本は判断力や想像力を養うと思っています。私も本を読みたいと思つていますが、子育てや家事が忙しく、なかなか読む暇がないのが現状ですが、もうすぐ長男も小学校に行き子育てが一段落しますので、ベストセラーの本や賞を受けた本を読みたいと思つています。

歴史との出会い



河崎 昭三さん
(早通北3・61才)

私は三条市で金物関係の仕事で四十一年間やりましたが、六十二年八月に退職して、昨年九月末に豊栄市に転入しました。

勤めていた時は一月に一回、一週間から十日間位の県外出張があり、日曜日に出張先の図書館で郷土誌などを読むことが多くありました。特に沖繩へは五十二年から八年間、二か月に一回出張したの



中央公民館図書室には面白い本がいっぱい

で、県立図書館でよく土地の歴史などの本を読みました。その地域の歴史や土地柄がよくわかり仕事上でも助かりました。今まで読んだ中では『三国志』が一番おもしろかったです。現在は中央公民館や早通地区公民館の図書室から借りて読んでいます。最近では上杉謙信と武田信玄の戦いの物語『信濃戦雲録』を三巻まで読み終わりました。最後の巻はまだ来ていませんが楽しみにしています。

序の舞



山田キヨ子さん
(川前・54才)

正直に申し上げまして、一冊と言われると困るのですが、あえてあげれば宮尾登美子の『序の舞』です。

四、五年前になりますが、この本は主人が買ってくれたもので読後まもなく上越市で上村松園の展覧会があり二人で観に行きました。赤いす模様の着物に扇を持って舞っている女の人の絵、実物の『序の舞』に出会い、本で読んだばかりの感動が再現し忘れることができなませんでした。

『序の舞』は女性で初めて文化勲章を受けた女流画家、上村松園の未婚の母として芸術家として、ひたむきに生きた生涯を書いたものです。絵をかく者は常に気持を若くも

心に残る一冊



遠藤 幹雄さん
(嘉山4・35才)

たないと絵が年寄りくさくなると言つて、終生薄化粧をしていたという松園、写真で見ると松園は瘦身に縞の仕着がなにか、いきな艶っぽさを感じさせます。私も気持ちだけは、いつも若々しくありたいと思つています。

私が読んだ本の中で特に印象に残っているものは、灰谷健次郎氏の『太陽の子』という作品です。

この本は、五、六年前に図書館から借りて読んだのですが、読んでいくうちに、だんだん作品の中に引き込まれていき、あつと言う間に読み終えてしまいました。

読み終えてみると、今度はこの本が欲しくなり、更にこの作者が書いた別の本も読みたくなるような本でした。

ほかにも印象深いものが多いのですが、灰谷氏の作品に出会った最初の本ということで選びました。この作品の内容は、ふふうちゃ

四月号のテーマ

『休日の過ごし方』

現在、週休二日制で休みの日が増えていきます。また、四月末からは恒例のゴールデンウィークが始まります。そこで四月号は市民のみなさんの休日の過ごし方をテーマとします。

ユニークな一日、連休期間の計画などなんでも結構です。多数の方の声をお待ちします。

◆提言される方へ 投稿、電話いづれの方法でもかまいません。投稿の場合は住所、氏名、電話番号を書いてください。連絡先は市企画課広報広聴係(☎三八七―一三四〇)へ。

◆締切り 三月十五日(水)まで。